

私の戦争体験 ～戦争に近づいた思い出として～

T.S. ♀

母から聞いた戦争：

母は伊豆の東海岸に住んでいました。まさに米軍機の通り道だったのだと思いますが防空壕によく入ったようです。16歳くらいするとき、下田の女学校からの学徒動員で横須賀の工場で旋盤工の仕事をしたそうです。友人が機械の事故で指を挟まれたこと、空襲で逃げ遅れた友人が亡くなったことを、あまり詳しい説明はなく聞きました。

終戦の玉音放送は聞いていますが、意味はわからず。まわりの人々は泣いていたけれど、自分とはとにかく戦争が終わったのがわかって嬉しかったそうです。

それらの話を私が聞いたのは小学校の頃だったと思います。写真も何も見てはいないのですが、いつ思い出しても同じ情景です。はじめに想像したシーンが映像として焼き付いています。

ところで、上記の「防空壕」は、大分長い間（おそらく20年ほど？）地元の人々の冷蔵庫代わりに活用されていました。今は柵がかけられています。

祖母から聞いた戦争：

刀など大事なものはすべて献上した、ということは聞きましたが、それ以外は覚えていません。特に孫と一緒にいるときには思い出したくなかったのでしょう。

夏休みは祖母と過ごし、その家に『ロボット三等兵』という漫画があったのをよく覚えています。子供だった私は祖母の家にあるものは何でも骨董のように思っていたので、その漫画も「遠い昔の戦争中の漫画」だと思っていましたが、実は戦後も大分経ってから継続して発行されていたものだとわかりました。（資料別紙：ロボット三等兵）

父の戦争体験：

本人から戦時中の様子を聞いたことは一度もありませんでした。しかし、ある年、戦時中を共に過ごした仲間との日誌をもとに書籍を出版。そこで初めて父の戦争体験を印刷を通して読むことになりました。

父は当時、理学部の学生だったため徴兵をされませんでした。空襲を逃れてクラスで諏訪に疎開。村の旅館が部屋を提供してくれました。その毎日を10名足らずの学生たちが細かく綴っていたのです。勉強のことより食料の調達が重大であったのがわかります。東京との往復で目前にした空襲の火災のこと、玉音放送のことなども細かく書いてありました。戦後、皆、その存在を忘れていたのですが、15年ほど前、その大学の施設移転の整理の際に事務の方によって黄褐色に変色したノートが発見されたことで、次々と声を掛け合って再集合し、出版社の応援を頂きながら完成させたものです。諏訪の方達をご自分たちこそ苦しいときに学生のために食料を分

けてくださった、その当時の方々を訪問し、久しぶりにお会いし、あるいは、お墓参りをしながらの編集だったようです。

旅で出会った戦争2編：

(1)

1979年の晩秋、西ドイツのゲッチンゲンにて。

東ドイツを一目でも見たかったので地元の方に国境に案内してもらいました。郊外の森のようなところを抜けると鉄条網が見渡す限り続いている草原に出ました。幅3メートルほどの車道もプツンと鉄条網の下で終わって、その先は草に覆われていました。鉄条網は間を約50m〜100mおいて二重になっていました。二つ目の鉄条網のさらに向こうに監視塔が建っていて軍服の人がいるのがよく見えました。私は、道の終わっているぎりぎりのところで車を降りて立ってスケッチ。こちら側には、見渡す限り我々4人以外には誰もいません。その間中、監視塔から双眼鏡で真っ直ぐに注視されているのがよくわかりました。緊張感に負け、水彩着色をやめて、クロッキーの段階で早々に切り上げました。今になって初めて、あのような寒くて雲の重い日に、監視塔に向かったの草原の風景のスケッチは怪しいものであったと気がつきます。

(2)

やはり同じ頃の西ドイツ、ハイデルベルグで。

当時60代半ばくらいの方の自宅で家族同士で食事をしたときのこと。なぜか、「シンボルマーク」の話題になりました。氏は、自分は戦争中に「親衛隊」だったと話し出しました。とても温厚で信頼を寄せられている全身が優しさのかたまりのような人です。別の「親衛隊」があったのか？などと考え、不思議な顔をすると、「こういうのがマークだったんだよ」と、お孫さんも覗き込んでいる中、紙とペンを出して線を描き始めました。直線を鍵型に折りはじめ、やはり仕上がったのはハーケンクロイツ。その絵を描いているときの表情は、懐かしんで、誇らしく思っていたように見えましたが、氏の実際の想いは当時の私には察することができませんでした。